

BTM ARCHIVE 2001-11

バックナンバーからの抜粋 2001年11月号より

Interview Paul Edmondson

インタビュー ポール・エドモンドソン

Interview / HARUKI Hisashi 春木久史



取材を振り返って

ヨーロッパを中心とするワールドエンデューロシーンから、アメリカのクロスカントリーレーシング、それを代表するGNCCへの参戦。2005～2006年のユハ・サルミネン、そして2007～2008年のデビッド・ナイト(サルミネンともいずれもタイトルを獲得)の活躍が知られるが、その草分けとなったのがここに紹介するポール・エドモンドソンだ。“エディ”は、単にライダーとして、この新しいジャンルとも言えるレースに参加しただけではなく、英国での“Fast Eddy Cross Country Series”の開催などを通じ、ヨーロッパのシーンにクロスカントリーレーシングを紹介。アメリカとヨーロッパのオフロードレーシングをつなぐ役割を果たしてきたと言えるかもしれない。ヨーロッパのシーンでは、この後急速にクロスカントリーレーシングの人気の高まっていく。環境保護機運の高まりのなか、エンデューロの開催地が狭まっていくこととも呼応した流れであったように思う。取材は2001年ISDEフランス大会のパドックで行った。当時カワサキチームグリーンのライダーとしてアメリカのGNCCを中心に走っていた。

以下、BTM本誌からの再掲載(一部修正)

「GNCCって知ってるか？ アメリカでやってるレースなんだけど、クロスカントリーレーシングのチャンピオンシップで、最近ポールはそれに出てるんだ。面白いからポールにインタビューしてみたら？」といってポール・エドモンドソンを引き合わせてくれたのは、世界選手権エンデューロでは、そのポールのマネージャーもやってる、BTM読者にはおなじみのJ&B(ジェニー&ベルナード・ホジキンス)。このインタビュー記事は、シックスデイズの期間中に時間をみて何度か話をしたものを編集して構成したもので、ちょっと散漫になってしまうかもしれないけど“Fast Eddy”と呼ばれたトライアル出身の天才エンデューロライダー、そして現在も新たなチャレンジを続けている「戦うライダー」の姿が、少しでも伝われば幸いだ。

トロフィチームで走らない理由

—こんにちは。3日目を終わったところですが、調子はどうですか？

Eddy まあまあといったところかな。ただしクラブマン級のライダーたちと同じタイムスケジュールなので、スペシャルテストでは遅いライダーたちをパスするのに苦労しているよ。ひとつのテストで多いときには3~4名のライダーを追い越さなくてはならないから…。ベストラインを外してアタックしなければならないので、良いタイムを出すのが大変なんだ。

—マシンも順調ですか。

Eddy カワサキはシャーシが強靱で、エンジンもコーナー立ち上がりの加速が良く、モトクロステストで扱いやすい。もう何年も乗っていて、セッティングも上手くいっているから、マシンについて問題は全くないよ。

—今回はデビッド・ナイト、ジュアン・ナイトとともにクラブチームでエントリーしていますが、チームとしての調子はいかがですか？

Eddy 2日目にデビッド・ナイトがクラッシュしてリタイヤしてしまったからね。もう好成績は望めないけど、いいライダーが揃ったチームだと思う。デビッド・ナイトも初日はほくもよりポジションが上だった。彼がクラッシュしたのは、やはり遅いライダーをパスするために、ベストではないラインにアタックを続けたからなんだ。二人ともまだ若いライダーだから、これから経験を積めばもっともっと強いライダーになっていくと思うよ。

—今回のルートは例年のシックスデイズと比べてどうですか？

Eddy まあ、シックスデイズは毎年こんな感じだけど、スペシャルテストは少し難しいよね。タイム差がつきやすいように思う。スピードが出ないところが多いからね。

—あなたは十分にワールドトロフィチームで走るだけの実力を持ったライダーだと思うのですが、クラブチームで走っているのはなぜですか。

Eddy 難しい質問だね…。

—あなたの選択ですか？

Eddy そう、ぼくの選択だ。まず現在のイングランドチームは、例えばぼくが走ったとしても、フィンランドやイタリア、スペインを向こうに回してトロフィを争うことはできないということがひとつ。ぼくはライダーとして常に勝利を目指して走りたい。クラブチームでエントリーし、クラブチームでの優勝、そしてトロフィチームにも負けられない活躍をして実力を証明したい。そこで今回はデビッド、ジュアンとともにクラブチームを作った。もうひとつの理由として、デビッド、ジュアンと同じように、ぼくもマン島出身であるということも関係がある。

—今後もワールドトロフィチームに加わることはないのでしょうか。

Eddy ACU(イギリスのフェデレーション)がワールドトロフィチームというものをどのように考えているかということが重要なんだ。

USAの体験がもたらしたチェンジ

—AMA(アメリカのフェデレーション)のヘア・スクランブル、それにGNCCにも参加してますよね。今はどこに住んでいるんですか？

Eddy アメリカにはレースの度に飛行機で通ってるんだ。住まいはイングランドだよ。

—長年エンデューロを続けてきたポールにとって、アメリカのクロスカントリーはどんなものでしたか。

Eddy エンデューロと似たようなものだという人もいると思うけど、走ってみるとまったく違うものだよ。ライディングの仕方もかなり違う。モトクロスに近いっていいと思う。実際、アメリカのクロスカントリーライダーには、モトクロスを並行してやってる人も多いし、実はモトクロスがメインという人もいる。

—アメリカのレースでの経験は、あなたにどのような影響を与えていますか。

Eddy すごく大きなチェンジが起こったと思う。GNCCというレース、そしてアメリカのライダーたちから

はアグレッシブになることを学んだ。ぼくはずっとイングランド、ヨーロッパのエンデューロをやってきた。ぼくが長いエンデューロの経験で身につけてきたのは、とにかくスムーズなライディング。ミスをせず、疲れず、マシンもタイヤも傷めることないライディング。そしてスペシャルテストでもアグレッシブである必要はなく、効率良く一番のタイムを出すことが求められていた。確かにまずまずの結果を残してきたと思うけど、ぼく自身の成長は、ある時からストップしてしまったんだ。でもアメリカでの体験を通じてアグレッシブなライディングを身につけ、そしてアグレッシブなメンタリティも取り戻すことができた。このエクスペリエンスは自分にとって大きなプラスになったと思う。このシックスデイズを走っていても、常に前向きでいることができる。

ーアメリカのクロスカントリーレーシングには大きくわけて、東海岸的なレースと、西海岸的なレースがあると思いますが、ポールが好きなのはどちらのタイプですか。

Eddy 東海岸のコースのほうはずっと走りやすいね。西海岸のハイスピードなデザートはあまり得意じゃない。それに、西海岸は飛行機での移動時間が長くて、どうも調子が出ないことが多いんだ!!(笑)

ーアメリカのライダーでひとりを挙げるとするならば、それは誰ですか。

Eddy 本当に良いライダーがたくさんいる。でもエンデューロにも強くて、そしてクロスカントリーでも速いライダーというなら、ロドニー・スミスがいるね。

新たなチャレンジは!

ーアメリカのレースも新しいチャレンジですが、次のチャレンジ、次の目標を教えてください。

Eddy 再びワールドエンデューロのチャンピオンを獲得することだよ。かつては“Fast Eddy”なんて呼ばれたこともあったけど、現在の自分の力で再びワールドを戦ってチャンピオンを勝ち取りたい。スムーズさに加えて、スペシャルテストをよりアグレッシブに走ることができるようになったので、この実力をワールドチャンピオンシップで試したいと思っている。

ーエンデューロからラリーレイドに転向するライダーも少なくありませんが、ポールはラリーレイドに興味を持っていますか。

Eddy ラリーレイドのことはあまり詳しく知らないんだけど、危険というイメージを持っている。この間のマスターラリーでBMWのジョン・デーコンが死んだのを知ってるよね。彼は、ぼくの友人だったんだ。もちろん彼はそのリスクについて充分に知っていたはずだけど、残念なことだよ。それと、ぼくはエンデューロやクロスカントリーレーシングで、ライディングのことにだけ集中している時間のハイな感覚が大好きなんだ。ラリーレイドはルートブックを読んだり、GPSを使ったり色々なことをするだろ? マシンもすごく特殊だし…。きっと家族もぼくがラリーレイドをやることには反対するだろうね。今のところラリーレイドを走ることは、考えていないよ。

ーそれでは、シックスデイズとは、今のあなたにとって、どんな存在ですか。

Eddy もちろんこれも重要なチャレンジのひとつだよ。ワールドエンデューロチャンピオンシップほどハードではないけれど、ISDEにはISDEだけの難しさがある。なんといっても、1日を確実にこなして翌日につなげ、また翌日もというように、ワンステップずつこなしていく感じが楽しい。まあ、今回はクラブチームとして好成績を残せないのが残念だけど、シックスデイズも大切に思ってるよ。

ーでは、この後もがんばって。幸運を祈っています。

Eddy ありがとう。



ポール・エドモンドソン

Paul Edmondson 1969年7月17日生
チェイスタウン(英国)在住

8才で初めてトライアルバイクに接し、長くトライアルコンペティションで活躍するが、エンデューロに転向。イギリス、ヨーロッパのエンデューロで最速のライダーとして活躍。ブリティッシュ選手権、世界選手権で多くのタイトルを獲得。3年前からカワサキチームグリーンメンバーとしてアメリカのクロスカントリーレースに参戦。現在はイギリス、アメリカを往復しつつ、クロスカントリーとエンデューロの二種目を両立させる生活。夫人

アマンダさん、そして元気な男の子ジャックとヘンリーに囲まれる幸せな生活。趣味はイベントのオーガナイズ。パスタとコークが好物だ。

6 x British Enduro Champs

3 x World 125cc Enduro Champion
1 x World 250cc Enduro Champion
11 x ISDE Gold medals
1 x AMA Hare Scrambles Champion
(当時のまゝを掲載)



山岳ルートの特ダクトでしばしば見せる、絶妙なバランスのうゑに成り立った美しいライディングスタイルに驚く人も、彼がトライアル出身であることを知ってうなずくだろう。そしてスペシャルテストでの走りは、別人のように、アグレッシブでたくさんエンデューロライダーのなかでは荒々しくさえ見えるほど。前へ、前へ、リアタイヤが大きくスライドするのにもかまわずスロットルを開けていく走りは、USAでのエクスペリエンスが彼にもたらしたものだ。